



Data

監督: ユン・ジョンビン
 出演: ファン・ジョンミン / イ・ソ
 ンミン / チョ・ジヌン / チ
 ユ・ジフン / キ・ジュボン

👁️👁️ みどころ

東西冷戦の時代は『007』シリーズもシリアスなものが多かったが、西側の勝利が確定した後はドンパチのスリルを追求するものばかりに。また、リアルアクションが売りの『ボーン』シリーズも、中東が舞台になると物語が複雑でイマイチ……。しかし、今も38度軍事境界線があり、北朝鮮による核開発問題、武力挑発問題の緊張関係が続く韓国では、スパイ(=工作員)は銃の腕よりもリアルさと商売上手さが大切。しかして、黒金星(ブラック・ヴィーナス)と呼ばれた男の工作とは？

去る7月21日の参議院議員選挙の結果は予想どおりだったが、1996年4月に実施された韓国の国会議員の選挙では、直前の北からの武力挑発の結果、金大中率いる野党が敗北！しかし、翌97年12月の大統領選挙に4度目の立候補をした金大中は？日本で2009年に起きた政権交代が「悪夢」だったかどうかは別として、軍事独裁政権を経てやっと民主主義国になった韓国で、1997年に政権交代が起きたのは一体なぜ？そこで黒金星は一体どんな役割を？“遠くて近い国”、そして“近くて遠い国”、韓国でのそんな実話に基づく本格的スパイ映画を、しっかり勉強したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■実話に基づく本格的スパイ映画が登場！■□■

スパイ映画はハラハラドキドキのストーリー展開が映面向きだし、実話に基づくものが多い。とりわけ、東西冷戦時の『007』シリーズはシリアスなものが多かった。しかし、ベルリンの壁が崩壊し、ソ連邦の分解が始まって、西側の勝利が確定すると、次第にスパイ

イ映画のシリアス性が薄れ、エンタメ性が強くなってきた。そのことは、1962年～2015年まで、計24作にも及ぶ『007』シリーズを見ればよくわかる。しかして、近時は、一方では『ボーン』シリーズのように、中東を舞台としたリアルなものが登場し（『シネマ 2』120頁、『シネマ 16』176頁、『シネマ 29』162頁）、他方では『キングスマン』シリーズのような荒唐無稽なスパイものが登場している（『シネマ 37』213頁、『シネマ 41』未掲載）。それは世界が平和になっていることの表れの一つだから、ある意味で喜ばしいことだが、映画の質（出来）としてはイマイチだ。

そんな時代状況の中（であるにもかかわらず）、韓国では、実話に基づく本格的スパイ映画が登場！これは、同一民族が南北に分断された悲劇を解決できない韓国では、今なお38度軍事境界線をはさむ緊張関係や北の核開発、武力挑発を巡る緊張関係が続いているため、互いにスパイ（工作員）の存在が不可欠なためだ。本作については、チラシにもパンフレットにも『タクシー運転手』、『1987、ある闘いの真実』に続く、実話に基づく衝撃の問題作！と紹介されている。私は、後者は観ていないが、1980年5月の『光州事件』をテーマとした前者は、『光州5・18』（07年）（『シネマ 19』78頁）と並ぶ、ものすごい問題提起作だった（『シネマ 42』28頁）。

「殺しのライセンス」を持った、イギリス“MI6”のスパイである「007ことジェームス・ボンド」も実在の男だった（？）が、本作の主人公となる“コードネーム：黒金星（ブラック・ヴィーナス）”と呼ばれた男ことパク・ソギョンは名前こそ変えているものの実在の人物。本作でそのパクを演じた俳優ファン・ジョンミンは本作の撮影に入る前に、直接その本人と会って話も聞いたそう。もっとも、本作は「実話」ものだが、あくまでフィクション。そしてフィクションだからこそ、いかようにも面白く作れるわけだ。

■戦後の韓国の歴史は？金大中の位置づけは？■

現在の韓国の大統領である文在寅（ムン・ジェイン）は、『弁護士』（13年）（『シネマ 39』75頁）の主人公として登場した盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領の愛弟子。そして、弁護士から政治家に転身し、第16代大統領（2003年～2008年）にまで登りつめた盧武鉉と同じ道を歩んでいるが、盧武鉉は退任後は親族の不正疑惑で自らが聴取されるという事態に陥り、2009年5月23日、釜山の自宅近くの岩山から飛び降り自殺をしているから、文在寅も心配だ。

他方、『大統領の理髪師』（04年）は、1979年10月26日午後7時40分に、青瓦台近くの宴会場で実際に発生した朴正熙大統領の射殺事件を、「大統領の理髪師」に選ばれた夫と、名女優ムンソリ扮するその妻の目を通して描いた名作だった（『シネマ 7』275頁）。また、『ユゴ 大統領有故』（06年）は、朴正熙大統領が韓国中央情報部長官の手によって暗殺された実話を、「韓国の大島渚」と呼ばれる「386世代」のイム・サンス監督が赤裸々に描いた問題提起作だった（『シネマ 16』126頁）。さらに、阪本順治監督の『K

T』(02年)は、2003年2月に5年間の大統領の任期を全うした金大中の拉致事件をテーマにした切れ味鋭い問題提起作だった(『シネマ2』211頁)。戦後の都市法を分析する上で私は歴代の内閣毎の歴史的区分をしているが、韓国の戦後の政治史も大統領毎に区切って考えればその変遷がよくわかる。その中で1997年12月の大統領選挙で当選し、5年間の任期を全うした金大中大統領の動きは異彩を放っているが、さて・・・。

現在の世界の不安要素は、イランと北朝鮮。もともと、トランプ大統領はイランには強硬姿勢を示しているが、北朝鮮の金正恩委員長とは米朝会談を繰り返し、「いい奴だ！」などとの呑気なことを言っている。しかし、もし北朝鮮が本当に核開発を成功させ、使用可能な核兵器を保有していたら・・・？それはまさに今この瞬間の危機だから、海を隔てた遠い地にあるアメリカとは違って、日本や韓国には差し迫った危機。とりわけ、1952～53年の朝鮮戦争が停戦状態のままの韓国にとっては、シリアスな問題だ。現在の文在寅政権は、保守派だった前政権の朴槿恵(パク・クネ)政権と違って、“新北政権”だが、それはかつての金大中政権も同じ。1997年12月の大統領選挙で4度目の挑戦をした金大中が大統領に当選したのは、一体なぜ？それを整理し考えるのは膨大な作業を必要とするが、本作を観れば、“黒金星”と呼ばれた男パクを通じて、2時間余りでその真相(裏側?)を知ることができる。折りしも、日本では7月21日(日)に参議院議員選挙が行われ、ほぼ予想どおりの結果が出された。しかし、1996年4月の韓国の国会議員の総選挙は？そしてまた、1997年12月の大統領選挙は？

■□■軍人から工作員(スパイ)兼事業家に!?そりゃ大変!■□■

日本が軍事拡大路線をひた走りに走っていた頃、男の子の憧れは、海軍なら「海軍兵学校」、陸軍なら「陸軍士官学校」だったが、そんなエリートコースとは別に、陸軍には「中野学校」というスパイ養成機関が存在していた。そのことは、市川雷蔵主演の『陸軍中野学校』シリーズでよく知られているが、スパイの養成はそりゃ大変な作業だ。しかし、本作では、それを一切省略し、導入部では、国家安全企画部のチェ・ハクソン室長(チョ・ジヌン)からいきなり「工作員になれ!」と言われ、その一言で、エリート軍人だったパクが対北の工作員として、へらへらと調子のいい金儲け本意の事業家になりきるストーリーが足早に描かれる。時は1992年。そして、パクにそんな指令が出されたのは、北朝鮮の核兵器開発の実態を探るためだ。スパイになるための基礎訓練をどこまで終えたのかわからないが、パクが向かったのは中国の北京。それは、北京に駐在する北朝鮮の対外経済委員会の所長リ・ミョンウン(イ・ソンミン)と接触するためだ。リ所長は、北朝鮮の外貨獲得の責任者で、最高権力者である將軍サマこと金正日と単独で会えるという重要人物だから、商売を通じてリ所長と接触できれば、パクが北朝鮮に入ることも可能に。そして、そうなれば、北の核兵器開発の実態を探ることも可能になるはずだ。

そんな思惑を胸にパクは、将校時代の厳格さはどこへやら、毎晩飲み歩き、パクチをし

ながら派手な商売で大儲けを続けていたが、実はその金の出所は全て韓国の国家安全企画部からの機密費だ。ちなみに、「国家機密費」の存在は日本も同じで、日露戦争の時は、秋山真之の友人で駐露武官だった明石元二郎が湯水のように金を使いながらロシアでの諜報活動を展開していたことはよく知られている。それと同じように、身分こそ実業家に化けているものの、今は工作員として活動しているパクの遊興費(?)の出所もすべて韓国の国家機密費なのだ。そんな派手な工作の結果、遂に1995年3月、金儲けの実業家としてマークされていたパクにり所長本人から連絡が入ったから、パクは大喜び。しかして、今日はり所長と初面談の日だが、さてり所長はどんな男?それに続いて、次は北朝鮮国家安全保衛部のチョン・ムテク課長(チュ・ジフン)を含む3者会谈となったが、チョン課長はどんな男?そして、そこではどんなテーマで、どんな虚々実々の話し合いが・・・?

■□■腹の探り合い、騙し合いの醜態をタップリと! ■□■

『インファナル・アフェア』全3部作は、マフィアへの潜入捜査官ヤンと、逆にマフィアから警察への潜入者ラウを主人公としたメチャ面白い映画だった(『シネマ5』333頁、336頁、『シネマ17』48頁)。そこでは当然、警察VSマフィアという相容れない組織の中に身分を偽って潜入した男同士の腹の探り合い、騙し合いが見どころだった。そしてそれは、南北朝鮮という敵対する国家同士でも全く同じだ。もっとも、パクとり所長間の腹の探り合いは商売をメインとしたものだから、少なくとも表面上は酒席も伴った和やかなものだが、チョン課長は軍人の権威を笠に着た高圧的な態度が目につく男だから、何かとやりにくい。しかし、パクにしてみれば、全くタイプの違うり所長とチョン課長の両者を相手にしていると、そこに北朝鮮側の矛盾点が見えてくるうえ、金正日に対する忠誠心のあり方の違いも見えてくるから何かと好都合だ。

しかして、「長期的にお互いの利益となるビジネスをご提案頂きたい」と申し出たり所長に対して、パクが提案したのは北での広告撮影。つまり、韓国からの撮影団を北に送り込み、北の美しい景色や美しい女性をバックに、広告写真を撮って韓国で配れば、韓国の商品も北朝鮮の商品も売れるから、互いにWIN-WINというわけだ。もちろん、パクの狙いは、それを拠り所(口実)にして核兵器施設に近づき、あわよくばその撮影をすることだが、もちろんそれは隠したまま。表面上はあくまで商売人風だ。この話が順調に進めば、パクもそのバックにいるチェ室長も万々歳。そう思っていたが・・・。

ちなみに、パクとり所長との腹の探り合いの中では、ニセもののロレックスが大きな存在感を見せる(?)し、親の死にぎわの言葉によって一切の酒を断っているというパクのこだわりがどこまで貫徹できるかが試される(?)ので、本作では2人間の銃撃戦ではなく、2人の名優が火花を散らす心理戦をタップリ味わいたい。

■□■1996年4月の総選挙は野党の敗北!それはなぜ? ■□■

米中の関税合戦を契機とした「貿易戦争」は一向に収まる気配がないが、そこで中国の習近平国家主席が採用しているのが長期戦。つまり、自分は終身国家主席への道を確立した(?)のに対し、米国のトランプ大統領は4年に一度の大統領選挙の洗礼を受けなければならないうえ、その任期は長くても8年で終わるから、それをじっくり待てばよいという戦略だ。北朝鮮は世界でも珍しい世襲制の国だから、初代の金日成の後を引き継いだ2代目金成日もその権力は死ぬまで続くもの。ところが、韓国は5年に一度の大統領選挙があり、国会議員の選挙もあるから政権交代もある。したがって、北朝鮮とすれば、それを利用しない手はない。それが金正日の戦略だった。そして、1996年4月の今、韓国では総選挙が迫っていた。

当時の大統領は金泳三(キム・ヨンサム)だったが、政界に復帰してきた野党のリーダーである金大中が、次第に国民の人気を集め、現政権を脅かしていた。そこで、金大中の勢いを削ぐためにはどんな手が有効・・・?本作では、総選挙の6日前である1996年4月5日に、北朝鮮から韓国への武力挑発が勃発するから、それに注目!これは現実の韓国の現代史の話?それとも、本作での創作の話?それはあなた自身がしっかり勉強してもらいたいが、この武力挑発によって保守的な心理に傾いた国民の多くが現政権に投票したため、金大中率いる野党は全国区で敗れる結果になったが、それは誰の計算に基づくもの・・・?そして、一体誰がそんな仕掛けを?現在のトランプ大統領の動きを見てみると、ひょっとしてそれは当時の与党である金泳三政権の企み?そんな風にも思えるが、さて・・・?

パンフレットには、秋月望氏(明治学院大学名誉教授)の「時代背景解説」と「映画の中に出てくるワード解説」があるが、これらは本作の面白さを理解するために必読!

■□■遂に将軍サマとご対面!その緊張感とリアルさに注目!■□■

日本でもかつては天皇陛下の姿を映画のスクリーンに登場させることは「不敬」とする雰囲気があったが、それと同じように、北朝鮮では「将軍サマ」と呼ばれている最高権力者の金正日の姿をスクリーン上に登場させるのは厳禁!?しかし、韓国では?そう思っていたが、本作のリアルさにとことんこだわったユン・ジョンビン監督は、将軍サマそっくりの俳優キ・ジュボンに見事に金正日役を演じさせているから、その手腕に注目!

リ所長からパクに、「将軍サマが会いたがっているから来てくれ」との連絡が入ったのは1996年4月27日。国会議員の総選挙で、予想に反して野党が敗北した直後だ。南北関係に軍事的緊張が走っている状態では、パクがリ所長に提案し、相互の商売でのWIN-WINを狙った「広告撮影」事業が進展しないのは当然。しかし、将軍サマに対して直接その事業の経済的メリット(=外貨獲得)を説明し、将軍サマのOKさえとれれば、工作人員としてのパクの任務は半分以上達成できたようなもの。そんな風に喜び勇んで北朝鮮に入り、ホテルに連れて行かれたパクは、チョン課長の命令下、「健康状態の精密検査」=「自

白剤を使った尋問」を強要されたから大変。もし、自白剤の影響でパクが本心を語ってしまえば、その場で殺されてしまうことは確実だ。

ちなみに、日本では太平洋戦争中の天皇陛下が真昼間から酒を飲みながら執務することはあり得ないが、将軍サマは真昼間からブランデーを飲みながら勤務しているから、アレレ・・・。もっとも、本作を見ている限り、金正日は二代目のボンボンではなく、ブランデーを飲みながらでもその質問は的を得ているうえ、威厳タップリで時間の使い方もお見事なもの。そんな将軍サマにどこまで直接モノが言えるのかは知らないが、パクは堂々かつ要領よく広告撮影事業のメリットを語り、将軍サマを説得するので、その姿に注目！もっとも、チョン課長の目には広告撮影事業は「腐敗した資本主義者の金儲け事業」と映っていたから、将軍サマの裁可を得てその事業がスタートしたことにチョン課長は大いに不満。すると、直ちに始まった「分断された南北が40年ぶりに行う共同事業」は好調に推移し、パクとり所長との間には不思議な絆も芽生え始めていたが、チョン課長の不満はいかなる方向に・・・？

■□■金大中が4度目の挑戦！97年12月の大統領選挙は？■□■

「民主主義国」では選挙のたびに「政権交代」の可能性はあるはずだが、日本でも2009年に現実に政権交代が起こるまで、それは机上の空論にすぎなかった。それは、朝鮮戦争後の軍事独裁政権を経て民主主義国になった韓国も同じ。そんな中、1996年4月の総選挙で敗北した野党の金大中は、翌1997年12月の大統領選挙に何と4度目の立候補をしたからすごい。そして、親北、北風政策を明確に掲げた彼の支持率は今やトップになっていたから、政権与党の金泳三は戦々恐々。それは、金泳三政権下の国家安全企画部で働いているチェ室長も同じだ。ひょっとして政権交代が現実となって金大中大統領が誕生すれば、国家安全企画部の見直し・再編はもとより、旧政権に忠誠を誓ってきた自分たちはお払い箱。下手すると、自分たちの行為が弾劾されて処罰される可能性も・・・。

そう考えたチェ室長が、金大中の当選を阻止するためのあらゆる策を練ったのは当然だ。しかして、チェ室長がとった北朝鮮との裏取引とは・・・？本作のクライマックスに向けてはそんな恐るべき裏取引の実態が示されていくが、同時にそれまで順調に推移していた南北共同事業も無に帰する姿が示されていくのでそれに注目！

何よりも驚かされるのは、その目的のためにチェ室長らは平気でそれまで功績を積み重ねてきた工作人員、黒金星ことパクを切り捨てたことだ。ある日の朝刊で突然、韓国の工作人員が北朝鮮の“外貨獲得目的のための広告撮影事業”を展開していたことが報道されると、その記事はすぐ北朝鮮にも。すると、それまでの商売を通じて人間的な絆まで生まれていたたり所長のパクに対する怒りは？本作はそこからラストにかけてリアルさを少し放棄し

(?)、男同士の友情物語にウエイトを移していくのでその是非を含めて注目！

■□■さらば友よ！ニセのロレックスとネクタイピンに注目！■□■

本作前半では、パクが贈り物として北に持ち込んだニセモノのロレックスが大きな役割を果たす。そして、中盤では「北での広告事業」の成功で友情(?)まで芽生えたり所長が自宅にパクを招いて感謝の気持ちを示すが、その際にささやかな贈り物としてパクに手渡すのがネクタイピン。まさにささやかな贈り物だが、注目すべきは、そこに刻まれていた「浩然の気」という文字。これは「様々な解釈があるが、本作の中では『士大夫(サデブ)』のあるべき姿や心根を備えているという意味で用いられている。」そうだから、その文字にはり所長の万感の気持ちがこめられているはずだ。しかし、共同して手掛けてきたそんな事業のパートナーだったパクが、南の職員だったとは！そんな怒りがり所長の持つ拳銃の手にこもったのは当然だが、そこからのストーリーは全く逆の予想外の展開に向かっていくので、それに注目！

り所長が拳銃を引いた後にパクに渡した通行パスによって、パクは朝刊が洒布されるまでの1時間以内に北朝鮮を脱出することができたが、逆にり所長は広告事業の責任を問われて処刑されてしまったはず。今は韓国に戻り、新たな事業を展開しているパクはそう確信していたが、ある日、北朝鮮の女優が韓国を来訪することになり、その仕事に付き添ってスタジオに入ると、何とそこにり所長の姿が見えたから、パクはビックリ！

かつて大ヒットしたフランス映画にアラン・ドロンとチャールズ・ブロンソンが共演した『さらば友よ』(68年)があったが、そのラストは警察に連行されるチャールズ・ブロンソンの煙草にアラン・ドロンが火をつけてやるシーンだった。だからこそ、同作の邦題は『さらば友よ』とされたわけだが、そのカッコ良さときたら……。それと同じように、本作のラストは、り所長が左腕につけたニセ物のロレックスと、パクがネクタイにつけたネクタイピンを互いに遠くから見せ合うシーンだから、それに注目！このカッコいいラストに拍手！そして、思わず涙も……。

2019(令和元)年7月26日記